

日本 前方後円墳時代 연구의 課題

藤田憲司

(日本 前大阪近つ飛鳥博物館長)

I.はじめに

II. 方後円墳の推移と概要

1. 巨大前方後円墳の動向
2. 大和以外で始まったもの
石槨と石棺と横穴式石室

III. 「古墳時代」と前方後円墳 体制論の課題

1. 前方後円墳の普及
2. 墳丘形態による階層論の矛盾
3. 前方後円墳と三角縁神鏡
4. 3世紀墳墓の編年と三角縁神鏡の副葬時期

IV. いま一つの課題 (前方後円墳時代の提唱)

I. はじめに

日本列島では3世紀後半から約350年間、前方後円墳という特殊な形の古墳が築かれている。南は鹿児島県から北は岩手県南部にわたって分布する。墳丘長200m以上の巨大前方後円墳が36基あり、墳長約100m級まで含めると300基以上ある。世界的にみても特筆される文化現象である。日本歴史ではこの時期を、本格的な律令國家が成立する前段階として「古墳時代」と呼んでいる。そのため古墳という言葉に特別な意味が付け加えられ、墳丘の形や規模、埋葬施設、副葬品がほとんど同じでも、弥生時代の墓は古墳ではなく、墳丘墓あるいは弥生墳丘墓と呼ばれている。

日本考古學で古墳および古墳時代を定義し古墳と區別して墳丘墓の呼称を用いたのは、近藤義郎氏と都出比呂志氏である。両氏が定義した「古墳時代」は、律令國家成立前段階に瀬戸内・大和(奈良縣)の首長を中心とした部族連合＝前方後円墳秩序(近藤1995b)、あるいは大和を中心とした首長連合による初期國家＝前方後円墳体制(都出1989)が全土的に形成された時代をさす。両氏の國家形成論は異なるが、前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の順に墳丘形態による首長墓の序列ができ、大和の勢力の規制のもとに各地の墓(古墳)が築かれたという点は共通している。奈良縣箸墓古墳(墳丘長280m)を目安に、より古い墳墓を墳丘墓あるいは弥生墳丘墓と呼び、箸墓古墳以降の墳墓を「古墳」と呼ぶこともほぼ一致している。多くの研究者が両氏の主張に触發されて墳丘形態による格差と規制が「古墳時代」にあったと考え、古墳と墳丘墓を使い分けている。そして「古墳時代」には様々な文化事象が大和から發信されたという。

明快な區分に思えるが、實際は亂用されている。墳丘墓と古墳の區分は両氏の仮説を前提とするはずなのに、箸墓より古い奈良縣纏向石塚やホケノ山前方後円墳も「古墳」と呼び、古墳時代に含める研究者もいる。明らかに両氏の「古墳・古墳時代」の定義と異なる概念がある。

近藤・都出両氏の説は日本考古學研究史の上でもっとも意義深い成果の一つである。とりわけ、初期國家段階を想定した都出氏の前方後円墳体制論は魅力的である。魅力的であるがゆえに、安易に同調して地域の事象を解説するのではなく、その仮説の問題点を検証する姿勢が必要である。

Ⅱ．前方後円墳の推移と概要

『前方後円墳集成(以下『集成』と略す)』全6巻(近藤編1991~2000)および『大和前方後円墳集成』(榎原考古学研究所編2001b)によると、日本列島には少なくとも約4800基の前方後円墳と約450基の前方後方墳がある。『集成』では3世紀半ばから6世紀末までを10期に区分している。ただし、その判断は執筆者間で一致しておらず、とりわけ初期の編年観の不一致が目立つ。「舶載」三角縁神獸鏡を副葬する前方後円墳を最古段階に位置づけているため、2期や3期で扱うべき墓も最古段階としている。その点を理解したうえで『集成』の時期区分どおりに数えると、1期の前方後円墳は約70基、2期は約90基あり、2期段階でもその分布地域は限定的である。同時期の前方後方墳の分布を重ね合わせると、2期段階でも前方後方墳が前方後円墳の分布範囲よりも圧倒的に広く、規模の上でも優位に立っている地域が多いことがわかる(第1図-藤田2004)。

前方後方墳は、周溝墓状のものを含めて1期に約80基、2期約90基、3期約70基とほぼ同数で推移しているが、4期には半減し、5・6期は總數10基に満たない。九州島から關東・東北地域にわたって、數的にも規模的にも前方後円墳が前方後方墳を上回る段階は3期後半以降である。瀬戸内から大和を中心に前方後円墳の築造が始まって約100年後の4期段階に前方後方墳は基本的に途絶える。ただし、出雲だけは前方後円墳そのものが4期まで見られず、四隅突出型墳丘墓の系譜を引いたと考えられる方形墓優位の時代が6世紀まで続く。他地域とは逆に前方後方墳は5・6期以降から増えはじめる。

3期以降の前方後円墳は概數で、3期200基、4期240基弱あるが、4世紀末から5世紀に屬する5期から7期の前方後円墳は160基、130基、190基とやや少なくなり、一轉して6世紀には8期260基、9期390基、10期650基と急増する。これにおもに9期以降に屬すると考えられる約290基を加えると、6世紀以降の前方後円墳數は5世紀代以前の總數の約1.5倍に達する。要するに、前方後円墳のうちの約70%は6世紀以降に屬する。西・北部九州や山陰、關東地域がその典型である。

1. 巨大前方後円墳の動向

一般に墳長規模200m以上のものを大型墳と呼んでいるが、前方後円墳の墳長規模分布から100m級～150m台を大型、160m以上を超大型墳として扱う(大型墳・超大型墳と略称する—藤田2002)° 墳長160mを超える超大型墳は1・2期の間は大和のみに分布するが、3期後半には大和に接する大阪湾岸にも広がる° 4期から5期にかけて九州の宮崎縣、瀬戸内の岡山縣(吉備)、日本海側の京都府北部、東では山梨縣、群馬縣、宮城縣にも広がる° 地域ごとに若干の時期差があるが、多くの地域でこの時期に、それぞれ地域最大の前方後円墳が築かれている° 岡山縣造山古墳や群馬縣太田天神山古墳などその幾つかは、大和の超大型墳を凌ぐ規模である° 大和内部にも変化がみられ、3期を境に超大型前方後円墳の分布は大和盆地東部から北部に移り、5期には南西部に移る°

5期の超大型墳の筆頭は墳長360mの大府百舌鳥陵山古墳と岡山縣造山古墳で、百舌鳥陵山古墳より造山古墳が古いと考えられている° 墳長300mを超える巨大前方後円墳は大和王権中心部より先に吉備(岡山縣)に築かれた° 吉備では、造山古墳の從屬的位置にある榊山古墳に陶質土器や馬形帶鉤が出土し、千足古墳に九州系の横穴式石室が用いられている° 熊本縣の石材で作った刳拔式の石棺もこの地に運ばれている° 列島最初期の須惠器窯も同じ地域内に築かれている° 列島最大級の前方後円墳を最初に築いた吉備の大王の視線は、九州島や朝鮮半島に向いていた° これらの事柄は、畿内の権力から入手したのではなく、吉備の首長が朝鮮半島や九州の勢力と獨自に交流し入手したものであろう° その視点に立てば、相前後して築かれた各地の大型・超大型墳も、大和(河内)の王権に規制されて築いたのではなく、それぞれの首長(王)がその力量に見合った墓を獨自に築いたと考える方が自然であろう° 言い換えると、大和(河内)の大王と各地の(大)王は力量の差はあつても、並立していたことを示しているのではなからうか(藤田2006)°

この頃から、伽耶系文物が姿を消し、伝譽田丸山古墳出土の鞍を始め、新羅系の帶金具や武具などが各地に増えるという(朴天秀2006)° この現象はA.D.400年前始まる伽耶の衰退、高句麗の南下と百濟の遷都、新羅の台頭など朝鮮半島の大きな変化と連動したものであろう°

6期から8期の超大型墳は吉備と畿内地域だけとなり、吉備では6期と7期に各1基の超大型墳が築かれているが、大阪府響田御廟山古墳(墳長486m)や同府大山古墳(墳長486m)と比べると圧倒的な規模の違いが認められる。7期から9期の間は大和に超大型墳はなく、大和最大規模の大型墳は墳長145mの奈良市杉山古墳となる。超大型墳は8期以降畿内に限定されるだけでなく、築造数も8期2基、9期2基、10期1基と少なく、一世代一基だけ超越的な規模の墓を築いている。

8期以降のもう一つの変化は、瀬戸内・畿内地域で前方後円墳の築造が減少するのに対して、九州北部や山陰、關東地域を中心に前方後円墳の築造が活発になる。8期以降に属する大型の前方後円墳60基余の内訳は、畿内に10余基、九州に6基、瀬戸内に1基、北陸に1基、東海に2基で、残り40基弱はすべて關東地域(東國)に分布している。超大型前方後円墳はないものの、東國はこの時期が前方後円墳築造の最盛期であった。

2. 大和以外で始まったもの 石槨と石棺と横穴式石室

箸墓古墳を代表とする最初期の「定形化した前方後円墳」の要素の多くは、大和以外にその祖形をもっている。箸墓古墳のような長いバチ形の前方部の祖形は大和にはなく、瀬戸内の香川縣や徳島縣、岡山縣、兵庫縣で成立している。竪穴式石槨も瀬戸内地方の弥生時代後期墳墓から始まっている。円筒埴輪の祖形である特殊器台は岡山縣で成立した。墓に青銅鏡を副葬する習慣も3世紀前半の畿内地方にはなかった。前方後円墳や方墳も各地の弥生時代墳墓にその祖形がある。箸墓古墳がそれら各地の要素を統合し、格付けをして各地の首長墓に浸透させたわけではない。箸墓古墳の畫期的な意義は、前例のない圧倒的な規模の墳丘墓を築いたという点であろう。

前方後円墳時代(あとで触れるが、私は「古墳」時代と呼ぶに前方後円墳時代と呼ぶ)が始まってのちにも、大和以外で始まり大和に伝わったものがある。その代表的なものは遺体を納める石の棺と横穴式石室である。

畿内で大王墓の棺と言われている長持形石棺の石材加工技術は讃岐(香川縣)から始まった可能性が高い。刳抜式の石棺は西部九州、山陰・北陸(日本海側)など各地にあるが、香川縣の鷲の山石(凝灰岩)製の割竹形石棺がもっとも古い。香川縣の割竹形

石棺は、約200km離れた大阪府玉手山3号墳に運ばれている。大阪府松岳山古墳の組合せ式の石棺は長持形石棺の祖形と考えられており、その石材の一部は香川県鷲の山の石材である。遠隔地に運ばれている石棺は他に、九州・阿蘇石の舟形石棺が熊本縣から兵庫縣御津町の古墳や京都府八幡車塚古墳に運ばれている(藤田197*)。阿蘇石の石棺は5~6世紀にも岡山縣、愛媛縣、香川縣、徳島縣、和歌山縣、大阪府、奈良縣、滋賀縣の各地に運ばれている。前方後円墳時代後期の畿内の家形石棺の源流は九州の舟形石棺であった可能性が高い。

横穴式石室は4世紀末頃に北部九州で始まり、大和で本格的に採用されるのは約100年後の5世紀末ないし6世紀からである。5世紀以前の方後円墳はその大きさにかかわらず基本的に単数埋葬であり、一般的に竪穴式石槨や粘土槨を埋葬施設としている。槨室構築の途中に棺が納められているため、墳丘を破壊しない限り、埋葬後は棺に近づくことができず、棺を開くこともできない。4世紀中葉以降は、より堅固な石棺が用いられ、棺蓋を開くことはさらに難しくなっている。この構造は、墳丘に二重三重に隙間なく樹立させた大きな埴輪列とともに、外部からの侵入者を防ぐためだけでなく、亡き首長が蘇ることのないように堅く封じ込める意図があったと考えられる(藤田2002)。その解釈はさておき、初期の方後円墳は埋葬された首長の遺体と二度と対面できない構造であったことは確かである。

それに対し、横穴式石室は同じ石室を開閉して追葬することを前提としている。横穴式石室の思想は前方後円墳と正反対の墳墓思想である。佐賀縣谷口古墳や福岡縣老司古墳(4世紀)は、竪穴系横穴式石室と呼ばれ、竪穴式石槨から横穴式石室への過渡期の姿である。福岡縣鋤先古墳は本格的な横穴式石室の最古例にあたり、2回の追葬が行われたことが明らかになっている。追葬時には、さきに埋葬した棺や遺体を直接目にしたはずである。時期が下ると九州北・西部や山陰では、石室形と呼ばれる獨特の石の覆いや側面に穴をあけた家形石棺が用いられている。埋葬した遺体と対面するための施設であり、開かれた棺と呼ばれている。先に埋葬した遺体を次々に石室の一角所に集め、新しい遺体を埋葬した例も数多くあり、死者に対する考え方(死生観)が大きく変化している(藤田2003、2007)。

死生観の変化は、墳丘築造思想にも影響を与えている可能性が高い。竪穴式石槨や粘土槨の埋葬は頂上部を埴輪列で囲うなど、墳丘上部を意識した形跡がうかがえ

るが、一般的な横穴式石室は墳丘側面に出入り口をもっているため、墳頂部への關心が少なくなり、祭祀の場所は石室入り口側や墳丘外の一畫に集まるようになる。埋葬施設を封印した円筒埴輪列も本来の意味を失い、埋葬空間に入る通路から發達した前方部そのものの意義を失わせた。横穴式石室の始まりは、初期の前方後円墳における前方部の意味を根底から打ち壊すものであった。横穴式石室の構造上、巨大な後円部を築くことの不合理性も際立たせることにもなった。

畿内の横穴式石室の始まりは九州よりも100年近く遅れる。その理由は、畿内の首長墓が前方後円墳であることの意義にこだわり、新しい埋葬習慣を受け入れるための予備期間と大きな轉機が必要であったためである。その轉機を想定させる現象は6期から始まる超大型墳の一極化と、6世紀の大阪府今城塚古墳であろう。河内に残されていた古い王墓の思想を断つて、新しい墳墓思想で築かれた大王墓である。今城塚古墳では熊本縣、兵庫縣、奈良縣の石材で造った家形石棺が出土している。畿内地域で横穴式石室を採用した最初の超大型墳である可能性が高い。

Ⅲ. 「古墳時代」と前方後円墳体制論の課題

前方後円墳秩序論あるいは前方後円墳体制論の問題点は、3世紀中葉過ぎに前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の順に墳丘形態による地域首長の格付けが全土的に始まったという論理に集約される。その論理を支えているのは、前方後円(方)墳のすみやかな普及と、「舶載三角縁神獸鏡」の副葬である。前方後円(方)墳と三角縁神獸鏡は表裏一体となつてかなりの速さで廣がったと想定されている。三角縁神獸鏡は卑弥呼とそれに續く大和の王權が魏から入手(のちに自ら製作)し、各地の首長に配布・分与されたと考える研究者も多い。配布・分与という言葉の媮には大和の王權から地域首長に下賜されたという意味が込められている。三角縁神獸鏡だけでなく、多くの副葬品や文化遺物が大和の王權から地域首長に分与されたという。それはまさに専制國家的な姿にほかならない。

1. 前方後円墳の普及

前方後円墳の普及が語られるとき、しばしば「前方後円墳または前方後方墳の分布」あるいは「前方後円(方)墳の分布」というように一括して表現される。しかし、都出氏の指摘(都出2005 75頁)にもあるように、弥生時代の円形周溝墓を起源とする前方後円墳と方形周溝墓を起源とする前方後方墳はそれぞれ別の成立系譜をもっている。

私は都出氏の主張に賛成する。前方後円墳は円形周溝墓がある瀬戸内地域で成立した可能性が高い。方形周溝墓は山陰を除き広く分布する。各地で方形周溝墓から前方後方墳に推移する過程が認められる。その推移をみる限り、前方後方墳は特定の地域から始まって各地に波及するのではなく、方形原理に基づく弥生時代首長墓の最終到達点の形態であり、地域ごとに成立する思想的背景を共有していたと考えられる(藤田2004)。

前方後円墳と前方後方墳が別個の墳丘墓の系譜から成立したという視点に立てば、大和で最初の定型的な前方後円墳が成立しても相当の期間は、各地域で弥生墳丘墓の伝統が脈々と受け継がれていたと解釈する方が自然であろう。最古段階の前方後円墳分布は瀬戸内から大和の一部に限定される。九州島から關東・東北地域にわたって、數的にも規模的にも前方後円墳が前方後方墳を上回る段階は3期後半以降である。前方後方墳に託された弥生墳丘墓の伝統はこの時期に途絶える。

3世紀半ばを起点に徐々に普及していく前方後円墳に対して、前方後方墳は次第に消え去る古い首長墓である。大和から前方後円(方)墳が普及するという解釈は適切ではない。

2. 墳丘形態による階層論の矛盾

墳丘形態の序列について、近藤氏は「それが實証されているわけではない。つまり最古型式前方後円墳と前方後方墳はともかく、円墳と方墳が數地域においてさえ具体的かつ確實な存在として指摘されているわけではない」(近藤1998 135頁)とし、都出氏もまた「円墳は前期の新しい段階に増加し、最古相の明瞭なものは

現状では顯著でない」(都出2005 307頁)という。最古相の円墳が明らかでないにもかかわらず、前方後円墳時代の初期から四つの墳丘形態による階層差があったといえるだろうか。

前方後円墳の規模が前方後方墳の規模よりも大きいことが格差の論據にされている。確かに3世紀末葉から4世紀にかけて、大和だけに圧倒的な規模の前方後円墳が集中する。大和の墓と同時期の各地の墓を比較すれば、圧倒的な差がある。それは、瀬戸内・畿内の複合集団が築いた大墳墓と、地域ごとの首長が単獨で築いた力量差であり、墳丘形態の格差とはいえない。地域単位でみると、前方後円墳が最大規模に達するのは、前方後方墳が築かれなくなった後の5世紀前後のことである。3世紀末葉から4世紀初頭の北陸地域では、前方後方墳が前方後円墳より圧倒的に大きい。島根縣(出雲)最大の墳墓は6世紀の前方後方墳で、前方後円墳より大きい。出雲地域の前方後円墳時代前期・中期の造墓事情をみても、前方後方墳や方形墳が前方後円墳の下位に序せられたとは考えがたい(藤田2007)。墳形と規模による格差論は時期単位、地域単位で比較すべきである。

都出氏は「定型化した前方後円墳が成立して、それが存続する約350年間、列島中央部の社會が前方後円墳を基軸とする身分秩序をもつ政治体制にあったことを重視するので、(中略)弥生時代の周溝墓とほとんど変わらないものがあるが、前方後円墳を頂点とする階層秩序の中に息づいているが故に、「古墳」なる特殊呼称をも有する」(都出2005 245~246頁)という。大阪府久宝寺遺跡では庄内式期から布留式期まで續く約50基の墳墓群が發掘されている((財)大阪府文化財センター—2007)。その中には前方後方形の墓もある。しかし、割竹形木棺をもつ久宝寺1号方形墓を除いて、前方後方形の墓を含む各墳墓は出土土器による時期的な判別以外、墳丘墓と「古墳」を區別できる客觀的な違いは認められない(第3図)。大和を中心とした初期前方後円墳体制を支えたであろう河内(大阪府中部)でさえ、墳丘墓と階層秩序のなかに息づく「古墳」との違いを見出せない。

3. 前方後円墳と三角縁神獸鏡

大和に初期の巨大前方後円墳を築く勢力の中心があったことは事實である。3

世紀の列島内で瀬戸内・大和のグループが最大勢力であったことも疑いない。三角縁神獸鏡の供給源が大和であることも確かであろう。近藤氏は「最古型式前方後円墳から出土する三角縁神獸鏡はそれが配布された各地首長の地位を内外に保証するものと考えられるから、武器や生産用具など他の副葬品と異なる政治的意味合いを顕著にもっていた」(近藤1998 121頁)という。前方後円墳秩序論あるいは前方後円墳体制論を支える主要な論点である。前方後円墳と三角縁神獸鏡は表裏一体で大和勢力から各地の首長に発信されたと考えられている。

しかしながら、大和以外の墳墓をみると、必ずしも三角縁神獸鏡と前方後円墳は連動していない。『集成』3期以前の墓で、畿内地域を除く列島西部の地域に「舶載」三角縁神獸鏡の副葬が認められるものは約60基ある。そのうち前方後円墳は21基、双方中円墳1基、前方後方墳5基で残りの32基は円墳か方形墳ないし方形周溝墓である(第2図)。山陰側では、兵庫縣北部地域を含め鳥取縣普段寺山1号前方後方墳を除く10基すべてが円墳か方形墳である。福岡縣では原口古墳、那珂八幡山古墳、名島古墳などの前方後円墳にとまなう一方で、藤崎遺跡第1地点(32次1号周溝墓)や藤崎遺跡第3次6号地点の方形周溝墓からも三角縁神獸鏡が出土している。那珂川町妙法寺2号墳は、これらの方形周溝墓と同規模か小さめの墳長18mの前方後方墳である。やや新しい時期に属する事例では、岡山市一宮天神山古墳群で、直徑約30mの円墳から三角縁三仏三獸鏡が出土しているものの、すぐ横にある墳長60m余の前方後円墳には三角縁神獸鏡はなく、獸形鏡と捩文鏡・重圈文鏡が確認されているのみである。

三角縁神獸鏡の入手と配布の古さを傍証するという最古型式(福永分類A・B段階)以前の組合せをもつ墓は、奈良縣黑塚古墳のほか、大阪府安満宮山古墳、兵庫縣西求女塚古墳、同縣權現山51号墳がある。西求女塚古墳と權現山51号墳は前方後方墳である。安満宮山古墳は方形墳と推定されているが、墳丘の有無もはっきりしない。正始元年銘三角縁神獸鏡を出土した兵庫縣森尾古墳も不整形な方形墓である。景初三年銘の三角縁神獸鏡をもつ島根縣神原神社古墳も一隅が歪んだ方形墓である。これらの墓は箸墓古墳の次世代の墓である。大和以外の首長墓に最古段階の三角縁神獸鏡を副葬した前方後円墳がほとんどなく、前方後方墳や最下位に序せられる方形墳が多い。前方後円墳と三角縁神獸鏡は一体的に普及したという想定と實態は一致していない。

4. 3世紀墳墓の編年と三角縁神獸鏡の副葬時期

前方後円墳のすみやかな普及を主張する場合、福岡縣石塚山古墳や大分縣赤塚古墳など本来2期ないしそれ以降と考えられる前方後円墳を初期の前方後円墳に含めて説明されている。「舶載」三角縁神獸鏡の副葬を根據にしているためである。それは「舶載」三角縁神獸鏡は製作後、速やかに「倭國」王の手にわたり、各地の首長に配布され副葬されたという想定をもとにしている。景初3年銘の畫文帶神獸鏡が4世紀の大阪府黃金塚古墳から出土した一例をみても、この想定そのものに無理がある。三角縁神獸鏡の型式を8段階に分けた福永伸也氏の分類(福永2005)によると、石塚山古墳、赤塚古墳、京都府椿井大塚山古墳、岡山縣備前車塚古墳にはA段階～C段階まで3段階の時間幅をもつ三角縁神獸鏡が副葬されている。時期の下る奈良縣新山古墳では6段階分の鏡を副葬している。A・B段階だけの鏡の組合せをもつ滋賀縣雪の山古墳は石製腕飾(鍬形石)をともなっており、最初期の前方後円墳ではない。鏡の伝世を否定するために用いた想定と、鏡の副葬を墳墓編年の根據にした矛盾である。石塚山古墳や赤塚古墳に伴う土器は、箸墓古墳より新しい布留1式段階の土器である。

3世紀代の墳墓には埋葬儀礼に用いられた土器を伴う、弥生後期以來の伝統である。土器を手がかりに編年を試みると、箸墓古墳の時期は布留0段階に相当する。吉備(岡山)系の宮山型特殊器台と都月型特殊埴輪をあわせもち、特殊器台から特殊埴輪への轉換期にあたる(図4)。纏向石塚古墳やホケノ山古墳は箸墓古墳よりも古い。箸墓古墳より新しく位置づけられる都月型特殊埴輪をもつ前方後円墳や前方後方墳も基本的に三角縁神獸鏡は出土していない。唯一、最古型式の三角縁神獸鏡を副葬する權現山51号前方後方墳で都月型特殊埴輪が出土している。景初3年銘をもつ三角縁神獸鏡が出土した島根縣神原神社古墳にも都月型特殊埴輪に似た山陰型特殊埴輪が出土している。これも箸墓古墳の特殊埴輪と比べるとより新しく位置づけられる(図4)。

青龍三(235)年銘方格規矩鏡と一緒に副葬され、三角縁神獸鏡の古さを証明したという安滿宮山古墳には埋葬儀礼用の土器がまったくない。畿内で埋葬儀礼に土器を用いなくなる時期は、福永分類三角縁神獸鏡3段階以降である。安滿宮山古墳を根據に、三角縁神獸鏡副葬時期が3世紀半ばに始まると主張するのは極めて危うい。

三角縁神獸鏡の副葬は箸墓古墳の次の段階以降に始まると考えるほうが妥当である。土器型式でいえば布留1式段階以降のことである。

箸墓古墳の實年代は、周辺墳墓出土資料の科學分析を援用して3世紀中葉と解釋されている。確實に墓の時期と對比できる試料は少なく、AMS分析結果はバラツキが多い。その許容範囲も前後100年近くあり、10～20年単位で年代を絞り込む研究には適さない。墓に直接關わる資料ではホケノ山古墳の木棺材のAMS分析があり、その下限をA.D.240年代に想定している(河上2001)。しかしその想定には、分析部位が表皮に近いと期待した想定がある。ホケノ山古墳出土土器より1型式古い土器をとまなう京都府大田南5号墓で青龍三年銘方格規矩鏡が出土している。冷靜考えると、240年代はホケノ山古墳の上限年代とみるべきであろう(藤田2009)。

箸墓古墳の實年代を直接示す資料はないが、大阪府下田遺跡で布留0段階の土器に伴った板材の年輪年代測定をもとにした270年代半ばとみるのが今のところもつとも説得力がある(福岡2005・藤田2005・2009)。したがって、三角縁神獸鏡の副葬開始はそれより後になり、箸墓と三角縁神獸鏡と卑弥呼を結び付けている論據は、はなはだ心もとない。こうした点を考えて、3世紀の墳墓の編年と實年代を整理すると図5のようになる。

Ⅳ. いま一つの課題(前方後円墳時代の提唱)

こうした前方後円墳体制に關する課題があるにもかかわらず、大和勢力を中心とした墳墓規制があり、箸墓古墳と三角縁神獸鏡を邪馬台國・卑弥呼に結び付ける傾向が強まっている。期待が先行して個別の檢証がおろそかになっていることを危惧する。このような發想の背景に、日本列島を一つの文化、一つの体制でまとめてしまう「日本的歴史觀」が潜んでいるような気がしてならない。

たとえば「弥生前期土器」型式に九州と瀬戸内・畿内と共通するものがあっても、畿内地域の「弥生文化」と九州島西北部の「弥生文化」は土器型式をはじめ青銅器祭祀・埋葬習俗・鐵器の保有形態など多くの点で異なっている。にもかかわらず九州島の「弥生文化」は瀬戸内・畿内の「弥生文化」と異なる別の文化、別の國という視點

(藤田1995)はあまり受け入れられていない。

列島各地の文化事象を一括する発想は前方後円墳時代になると一層強くなる。三國志魏書倭人條に記された「邪馬台國」を「列島を統括した最強の國」=大和とする発想である。魏書には魏と関係をもった國のことが記されているにすぎない。それが前方後円墳と前方後方墳という図式のもとで、邪馬台國連合(大和連合)と狗奴國連合(東海連合)という言葉まで用いられている。私をもっとも危惧する日本列島の「古墳時代」観である。列島で最強・最大勢力と魏書に記された邪馬台國を結びつける根據などまったくない。

巨大前方後円墳の成立を大きな変革期の始まりととらえ、列島社會の新しい歴史段階に位置づけることに賛成する。しかし巨大前方後円墳の築造が續いた約350年間の当初から「全土的」に一体的な体制が成立したという想定は、多くの問題点を抱えており、同意できない。「古墳時代」中期までは各地に大きな前方後円墳を築く権力構造が成立しており、「近畿中央部の首長と地方の首長との間にあったのはせいぜい同盟的な関係であつたろう」(白石2002)という指摘は一つの指標になると思う。また、地域國家の視点で「古墳時代」をとらえる門脇禎二氏(門脇1975)や田中琢氏(田中1991)の主張にも多くの理がある。

私は、超大型前方後円墳を3世紀中ごろに瀬戸内・大和(を含む畿内の一部)地域が連携して列島最強の勢力を形成したと考えている。箸墓古墳を築いた勢力である。それは九州島西北部の諸國や山陰諸國が占有していた鐵器入手法を変えるために、瀬戸内地域諸國が命運をかけた同盟であつた。が5世紀後半まで、瀬戸内・畿内地域の中でも離合集散を繰り返した。6世紀には畿内の大王權の交替があつたことも視野に入れておかねばならない。近藤・都出兩氏の觀點で畫一的に弥生墳丘墓と古墳に組分けしてしまうのは、各地の墳丘墓の歴史的展開を正確にとらえる芽を摘みかねない。

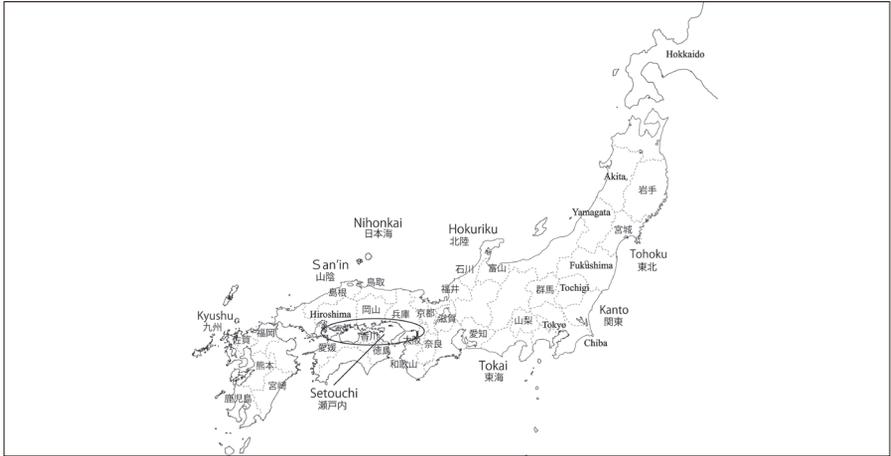
墳丘墓と「古墳」を区分し「古墳時代」と呼ぶことを危惧するいま一つ理由がある。墳丘墓と「古墳」の呼び分けは、弥生時代の墓と「古墳時代」の墓の區別が主題であつた。しかし、6世紀末から7世紀の「終末期古墳」や「飛鳥時代の古墳」、「奈良時代の古墳」は、前方後円墳体制下の墳墓とまったく性格の異なる墓である。3世紀代の墳墓を墳丘墓と「古墳」と區別しようとするのであれば、6世紀末から7世紀代の墳

墓も區別しなければならぬ。新しい時代の目安には始まりの論理だけでなくその終焉にも配慮が必要であらう。

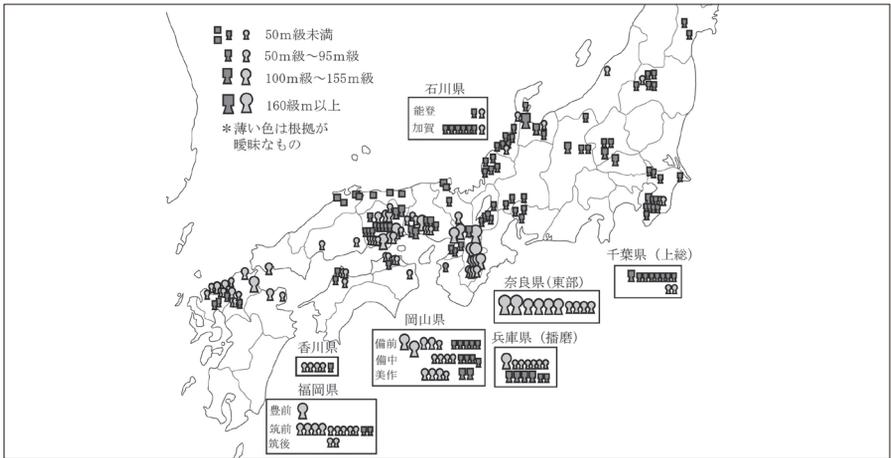
そういう視点から「前方後円墳時代」と呼ぶ近藤氏の提案(近藤1995 a)に積極的に賛成したい。おもに7世紀以降の墓を前方後円墳時代の「古墳」と區別しようとするためだけではなく、東アジアにおける日本列島の歴史的特性を表現するためにも適切な表現だと考える。さらに私は「古墳」を固有名詞や一般名称として用いるとしても墳丘墓と對置的な學術用語として扱わない。都出氏の區分論を白石氏の觀點で表現すると、5世紀中葉以前の墓は「古墳」ではなくなる。どのような体制下の墓かを問わなければ、墳丘墓と古墳の區別は不毛な議論になる。また「古墳」を日本考古學の時代性を含めた専用學術用語として扱うと、諸外國の墳墓、とりわけ韓國考古學で用いられている用語を勝手に書き換えなければならないことになる。

〈引用考文〉

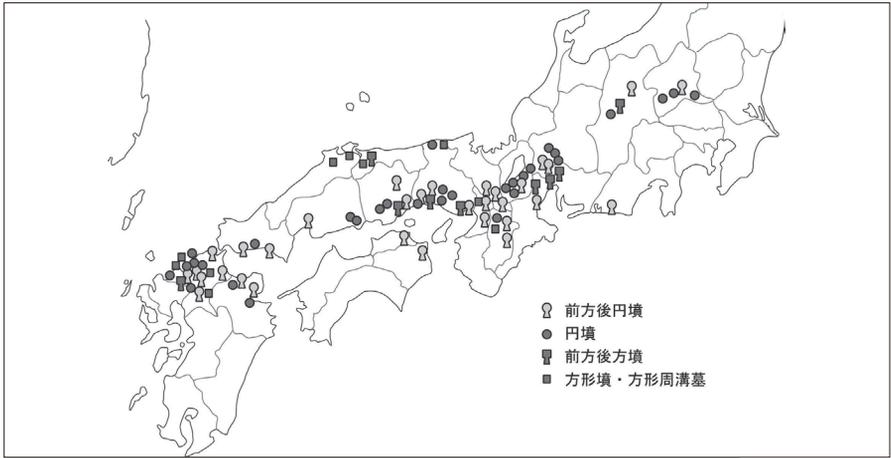
- (財)大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・龍華地区発掘調査報告書』Ⅶ
- 榎原考古学研究所編 2001 a『ホケノ山古墳』学生社
- 榎原考古学研究所編 2001 b『大和前方後円墳集成』学生社
- 門脇禎二 1975『古代社会論』『岩波講座日本歴史』古代2 岩波書店
- 河上邦彦 2001『まとめ』『ホケノ山古墳』学生社
- 近藤義郎 1977『古墳以前の墳丘墓』『岡山大学法文学部学術紀要』37号
- 近藤義郎 1995 a『前方後円墳と弥生墳丘墓』青木書店
- 近藤義郎 1995 b『あとがき—前方後円墳の成立をめぐる二つの課題—』『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 近藤義郎 1998『前方後円墳の成立』岩波書店
- 近藤義郎 2001『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版
- 近藤義郎 2005『前方後円墳の起源を考える』青木書店
- 近藤義郎編 1991~2000『前方後円墳集成』全6巻 山川出版社
- 白石太一郎 2002『古墳』『古墳時代』『日本考古学事典』三省堂
- 田中 琢 1991『倭人争乱』日本の歴史2 集英社
- 都出比呂志 1979『前方後円墳出現期の社会』『考古学研究』26巻3号
- 都出比呂志 1989『古墳がつくられた時代』『古墳時代の王と民衆』講談社
- 都出比呂志 1991『日本の古代国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱』『日本史研究』343号
- 都出比呂志 1998『総論—弥生から古墳へ』『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 都出比呂志 2005『前方後円墳と社会』塙书房
- 福永伸哉 2005『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 藤田憲司 1976『讃岐の石棺』『倉敷考古学館研究集報』12集 倉敷考古学館
- 藤田憲司 1995『討論』『弥生文化の成立』角川書店
- 藤田憲司 2002『前方後円墳体制論を考える』『大阪府文化財論集』Ⅱ(財)大阪府文化財センター
- 藤田憲司 2004『前方後円墳と前方後方墳』『かにかくに』八賀晋先生古希記念論文集刊行会
- 藤田憲司 2006『神原神社古墳と山陰の前方後円墳時代初期墳丘墓』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 藤田憲司 2007 a『後期前方後円墳分布を考える』『館報』11 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 藤田憲司 2007 b『横穴式石室と前方後円墳』『横穴式石室誕生』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 藤田憲司 2008『弥生墳丘墓と古墳』『大阪府埋蔵文化財研究会(第56回)資料』(財)大阪府文化財センター
- 藤田憲司 2009『箸墓は卑弥呼の墓か』『館報』12 大阪府立近つ飛鳥博物館



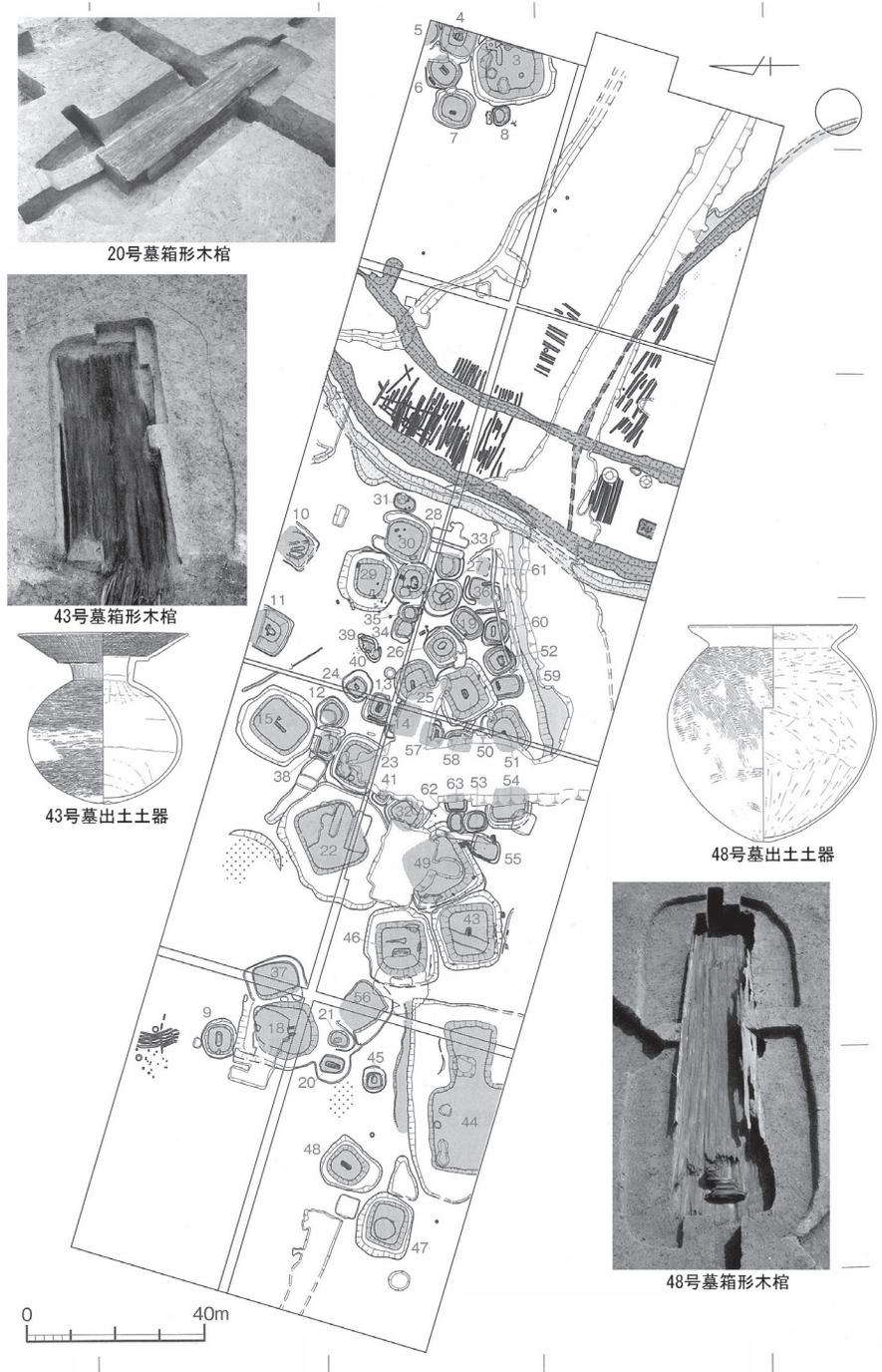
參考圖 日本縣名地圖



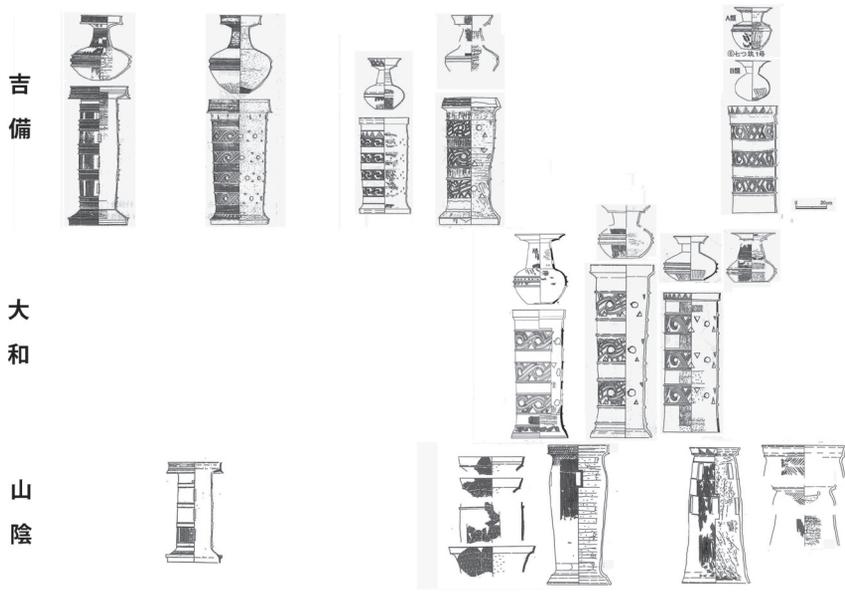
[圖 1] 1期の前方後円墳과 前方後方墳 分布圖(一部 方形墳을 포함) (藤田 2004를 一部 改變)



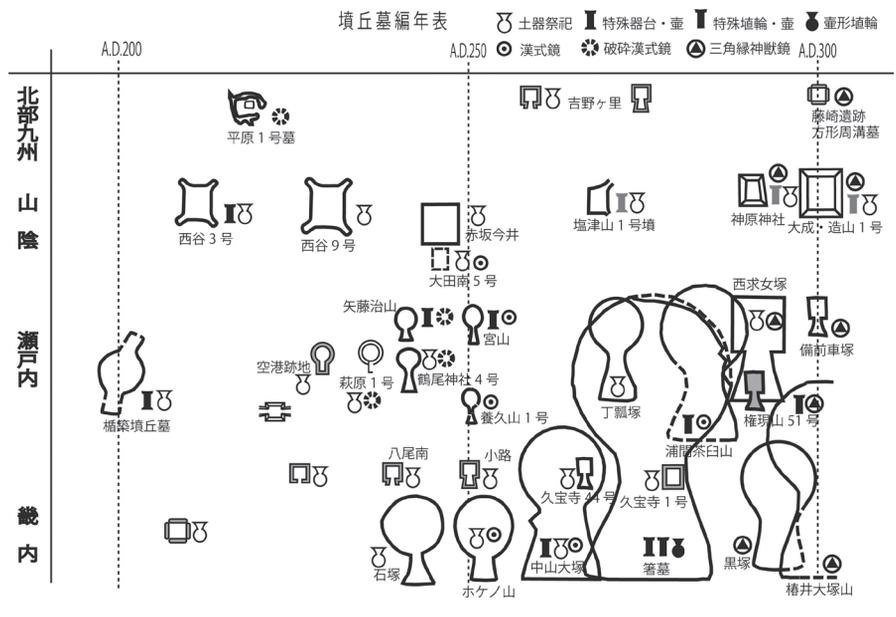
[圖 2] 「仿製」三角縁神鏡을 포함하고 있지 않은 三角縁神鏡 부장 墳墓 分布圖



[圖 3] 久宝寺遺跡の墳墓群 ((財)大阪府文化財センター 2007年 一部 改変)



[圖 4] 特殊器台와 特殊埴輪 變遷圖



[圖 5] 3世紀の墳丘墓 編年과 實年代